

奪衣婆信仰の展開

——境界と衣服

坂 知 尋

私は、日本の地獄イメージの展開、その中でも特に女性の表象に興味を持っている。日本の地獄風景には、男性の亡者と共に女性の亡者も描かれ、女性だけが落ちるとされる地獄もある。例えば、女性が血の池地獄に落ちることについて、女性は出産時や月経時の出血で大地や水を汚し、結果的に穢れた水が仏菩薩などに備えられるためと説かれる。また、石女地獄（あるいは不産女地獄）に落ちる理由として、子どもを産まなかったためという理由が挙げられる。このほかにも、嫉妬心から女性の姿が蛇に変わり、嫉妬の苦しみにとらわれ続ける両婦地獄があったり、女性が嬰兒を殺したことが地獄に落ちる原因と説明されたりもする。

地獄で苛まれる存在として女性に焦点が当たる一方、亡者を裁いたり罰したりする役割は閻魔や十王、筋骨隆々とした獄卒など、基本的には男性の登場人物が担うことが多い。獄卒の中にはまれに女の獄卒がいたり、男性の性欲の象徴としての女性が現れたりする。しかし、彼女たちに個別の名前や特定の性格が与えられているわけではない。その中で奪衣婆は、独自の名前と個性、役割を持った唯一の存在といえる。

奪衣婆は、人が死後に渡るとされる三途の川のほとりに現れ、死者の衣を剥ぎ取る役割を担う。彼女は11～12世紀頃から宗教書や経典に現れ始め、時代と共に性格や役割、他の神仏との関係性、利益などが変化していった。江戸時代には、閻魔の相棒、女性の救済者、子どもの守り神、安産、病氣平癒や裁縫上達など様々な現世利益の神として信仰されるようになった。

博士論文の指導教員で卒業後もサポートし続けてくださっているパトリシア・フィスター先生はじめ、多くの方々にご協力いただき、これまでの奪衣婆研究をまとめた英語書籍『Datsueba the Clothes Snatcher: The Evolution of a Japanese Folk Deity from Hell Figure to Popular Savior』（坂 2022）を刊行することができた。今回はその内容を簡単に紹介した後、書籍化に向けて取り組む間に感じたことなどを、「国際日本研究の課題と方法」というテーマに結びつけてみたい。

まず、第1章ではアジアにおける地獄の概念の展開について触れ、章の後半ではインド神話や仏教経典、道教経典に現れる女神たちと奪衣婆を比較検討した。特に道教の十

王経典に現れる孟婆という女神との類似点には興味をそそられた。

奪衣婆は日本版の十王経典『地藏十王経』の中に現れる。経典によると、人は死後、閻魔を含む10人の王により生前の行いを取り調べられるという。奪衣婆は2番目の王の宮殿の前を流れる三途の川のほとりで死者の衣を剥ぎ取る。

一方、道教版の十王経典ともいえる『玉歴』『玉歴至宝鈔』などでは1番目と10番目の王が裁判官の役割を担い、その他の王は様々な地獄の管理者として登場する。孟婆は10番目の王の宮殿のそばで、これから生まれ変わる人々の記憶を消すために特別な飲み物を与えるという。

奪衣婆と孟婆の記述や表象、役割、登場するタイミングは異なるが、どちらも十王信仰が展開する中で登場してきた老女であるということ、またこの二人が奪う衣服や記憶は、個人のアイデンティティと密接に関わっており、彼女たちがそれらを奪い去る役割を果たすのは大変興味深い。

第2章では、宗教説話や仏教経典、御伽草子などの文学作品に登場する奪衣婆の記述を整理した。

第3章では、主に地獄の絵画表現の中の奪衣婆を追いかけ、奪衣婆の視覚表現の基本的な要素について考察した。奪衣婆の描かれ方にはかなり幅があり、視覚表現の多様さは、おそらく、奪衣婆の容姿についての経典や宗教書の記述が漠然としているからであると考えられる。

とはいえ、奪衣婆が視覚化される際には、恐ろしげな老女であることや、川や樹木、衣服あるいは布といった要素が含まれることが多い(図1)。この要素は江戸時代の仏教図像集『仏像図彙』や『増補仏像図彙』にも採用されている(図2)。



図1 8枚組ポストカード『地獄極楽』のうち奪衣婆が描かれたもの(執筆者蔵)

一例だけではあるが、若くて美しい奪衣婆の事例にも遭遇した。『志度寺縁起』や『志度寺縁起絵』に登場する奪衣婆は、20歳くらいの美しい女官として登場し、一般的な奪衣婆のイメージとはある意味真逆の姿をしている。しかし、香川県の志度寺に実際に祀られる奪衣婆は、恐ろしげな老女像である。

第4章では、参詣曼荼羅中に現れる奪衣婆の姿を考察した。参詣曼荼羅には、寺社や霊山の風景、参拝する人々の様子、関連する伝説や物語、習俗などが描かれる。そこに奪衣婆が描かれたとき、宗教空間に隠された意味や物語を伝える役割を果たすことを示した。

第5章では、特に奪衣婆信仰における儀式や宗教実践に注目した。個人的に興味をかきたてられたのは、奪衣婆信仰の中で布や衣服の意味や役割が再解釈されていく点だ。経典において奪衣婆が剥ぎ取る衣は罪人の衣であり、死者の罪を象徴している。しかし、実際の奪衣婆信仰においては布の役割や機能、象徴するものは様々で、経典の記述の範囲内に収まるものではない。例えば、奪衣婆の彫像に死装束や僧侶の衣装を着せて祀ることがある。ここには、死後に奪衣婆に剥ぎ取られないように生前に衣服を納めておこうという意図や、僧侶の衣装によって救済者としての性格を強調しようとする意図がうかがわれる。また、儀式で使われる布や衣服がこの世とあの世を仲介する役割を果たしたり、救済を保証する装置として機能したりする。さらに、奪衣婆と布の関係が大胆に解釈され、奪衣婆が裁縫上達の神として設定される事例もある。

このように布や衣服が様々に解釈されることで、奪衣婆は本来の地獄の鬼婆という性格に加え、救済の神、あるいは多種多様な現世利益の神であるという性格をも獲得した。とはいえ奪衣婆本来の性格が忘れられたわけではなく、その時々に応じて三途の川のほとりの鬼婆としての面が強調されたり、そのほかの性格に焦点が当てられたりと奪衣婆信仰は豊かな広がりを見せている。

以上、書籍の内容について簡潔に述べたが、出版に向けて取り組む過程でいただいた助言や、それらに基づいた変更点などは、「国際日本研究の課題と方法」というテーマと関わるところがあるように思う。

出版の流れとしては、まず初めに出版社 Brill の編集者にご連絡し、Brill が学会に出展



図2 葬頭河婆（奪衣婆）

出典：土佐秀信 画『仏像図彙』三
武田伝右衛門 明治33。
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3442143>(参照2023-05-18)

した機会に合わせてご相談した。後日、出版社から送られてきた質問表に回答する形で、原稿の内容、読者層、また原稿の査読者としてふさわしいと思われる研究者等について記述した。書籍化に向けての変更点を説明する項目もあった。ここでは、より広い層に受け入れられやすくするため、先行研究についての言及を簡潔にすることや、地獄の展開について古代インドからまとめた部分を簡潔にすることを提案した。さらに、日本語や中国語などの知識がない読者に配慮し、日本語と中国語の表記を本文から抜き、代わりに用語リストを付けることについても言及した。

その後、質問票で述べた変更点に沿って修正した原稿を提出し、外部の査読者からの評価と出版委員会の評価に基づいた追加の助言を受け取った。特に外部査読者が修正点を具体的に示してくださったことにはとても感謝している。

そして、受け取った評価や指摘を考慮し修正しつつ、編集作業に入った。この段階で強く感じたのはエディターの重要性だった。Brill からエディター候補者として数名を勧められたが、最終的には日本文化や日本美術についての学術書籍の翻訳・編集の経験が豊富な井元智香子氏にお願いすることにした。井元氏に丁寧に目を配っていただいたおかげで、効果的な文章になったと思う。特に、表現を洗練させ、話の流れを円滑にし、議論に引き込むような構造にさせていただけたことには大変感謝している。経験豊富かつ日本文化や日本美術史の分野に詳しいエディターに出会えたことは私にとって大変幸運だった。

編集作業と並行し、絵画や文献のタイトルに英訳を付けていく作業も行った。本文から日本語表記を抜いたため、資料の内容が分からなくなるのを防ぐためであったが、複数の言語を行き来することによって、より丁寧に資料を扱えるという発見につながった。

さて、このような書籍刊行の体験を「国際日本研究の課題と方法」と結びつけるため、2017年に日文研で開催された国際シンポジウムの報告書『なぜ国際日本研究なのか——「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』（松田ほか編 2018）をヒントにした。この報告書では、日本研究という分野が現れた背景、国際日本研究の普及について、国際的に日本を研究するということはどういうことなのか、どんな利点や困難があるのか、など多岐にわたって議論をされており、とても勉強になった。

報告書の中で特に考えさせられたのは、宇野田尚哉氏のご論文「『日本学』の30年——1980年代と2010年代のあいだ」（宇野田 2018）だった。宇野田氏は、2010年代の日本の日本研究が置かれている状況について、日本の日本研究のガラパゴス化や海外の日本研究のジャパンバッシングという点について議論している。そして、後者の点に関連して、日本研究者ならばほとんどの人が日本語を使用するのだから、日本研究は日本語ですればよいという考え方もあるとしながらも、この立場を取ると研究成果がより広い研究の文脈で参照される可能性が制限されると指摘する。また、近い将来、世界の日本研究の中で日本語によってなされる日本研究は、ネイティブインフォーマントの役割を果たすにすぎなくなってしまうのではないか、日本語の論文は研究業績として認められにくく

なってしまうのではないかという懸念を示してもいる（宇野田 2018、55-56 頁）。

宇野田氏によって指摘されたことは、漠然とではあるが私も感じていた。日本研究は日本語だけですればいいとは思わない。しかし、ほとんどの日本研究者は日本語を使用するので、わざわざ自分の苦手なほうの言語で書かなくてもいいのではないかと思うこともたまにはある。とはいえ、私の研究テーマは仏教学や仏教美術史とも関わるものであり、これらの領域には日本語を使用しない研究者も多くいるため、英語で発信したほうが可能性が広がるというのは本当にそのとおりだと考えている。

例えば、奪衣婆に関連してこれから模索していきたいと個人的に思っているテーマとして、インドや中国の神話や伝説、宗教書に描かれる女神との比較がある。このような研究をする場合には、多言語で発信するほうが効果的だろう。ただ、私は日本語と英語しか使えないので、日本語圏外に発信しようとするすると英語になる。

多言語で、私の場合は英語で発信することの重要性を感じている一方で、研究者に限らなければ、私の研究テーマに興味を示してくれるのは日本語を第一言語とする人たちのほうが多いようにも思う。また、調査を行うにあたり、資料閲覧、儀式見学、画像使用など、寺院や地域の方々にご協力をいただいている。成果を報告すると喜んでくださるが、「日本語じゃないとよく分からない」とおっしゃられることもあり、きちんと報告できていないことについては心苦しく思っている。今後は自分の可能な範囲で、日本語と英語の両方で発信するように努めていきたい。

参 考 文 献

宇野田尚哉「『日本学』の30年——1980年代と2010年代のあいだ」松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和編『なぜ国際日本研究なのか——「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』（晃洋書房、2018年）。

松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和編『なぜ国際日本研究なのか——「国際日本研究」コンソーシアムシンポジウム記録集』（晃洋書房、2018年）。

Saka Chihiro. *Datsueba the Clothes Snatcher: The Evolution of a Japanese Folk Deity from Hell Figure to Popular Savior*. Brill, 2022.